



地域の底力——宮城県本吉郡南三陸町

大震災の思いを胸に刻みつつ 持続可能な未来を目指す 宮城県本吉郡南三陸町

東日本大震災から一〇年。
津波により甚大な被害を受けた
宮城県南三陸町は今、
記憶を大切に語り継ぎながら、
自然と共生していくための
あらたなまちづくりを着実に進めている。

南三陸町の中心部。その中心にある「南三陸町震災復興祈念公園」は、被災者の追悼と鎮魂、震災の記憶の継承、そして復興を祈念する場として、2020年10月に全体開園した。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

震災の夜の 決意を礎に目指す 持続可能なまちづくり

宮城県北東部、太平洋に面した南三陸町は二〇〇五年に旧志津川町と旧歌津町が合併して誕生した。その時から今まで一五年にわたり町長として町をけん引してきた佐藤仁氏は、一〇年前のできごとをこう語る。

「早く一体感のある町をつくりたいというのが、合併後の私たちの思いでした。四年の歳月を経て

新町建設計画がようやく八割程度まで進んだときにみまわれたのが東日本大震災です」

二〇一一年三月十一日、十四時四十六分に起きた震度六弱の大地震の後、南三陸町は高さ約一五メートルの津波に襲われる。町役場の防災対策庁舎で陣頭指揮を執っていた佐藤氏は五〇名ほどの職員らとともに屋上に避難し、アンテナや階段の手すりにつかまりながら何度も波をかぶった。その中で最終的に防災対策庁舎に残ったのは、わずか一〇人。南三陸町



は明治時代以降に限っても四度の津波を経験し備えはあったが、今回はその経験と想定をはるかに上回る規模だった。寒さに震えるなかで迎えたその夜。抛り所となったのは、奇跡的に濡れなかつ

(写真提供：南三陸町)



南三陸町と気仙沼市の境界に位置する田東山は、太平洋を望める山頂に奥州藤原氏との関わりが推測される11基の経塚（経典を土中に埋納した塚）が残り、5月中旬にはつじが咲き誇る。

(写真提供：かとうまさゆき写真事務所)

た一本のライターと数本のたばこ、そして流れてきたネット入りのミカン五個だったと佐藤氏は振り返る。

「ライターで火をおこし、生き残った一〇人で半分ずつミカンを分けて食べ、私を含む五人でたばこを回しのみしました。私の震災の原点、復興一〇年の歩みの始まりは、真つ暗闇の中で凍えていた防災庁舎の屋上なんです。自分たちは生き残ったのだから南三陸再生のために頑張ろうと声を掛け合ったあの夜が支えになり、この一〇年間、全身全霊で復興に取り組んできました」



10年が過ぎた今、南三陸町役場では震災後に採用された職員が4割を占めると話す町長の佐藤仁氏。記憶を風化させることなくいかに先々へと伝えていくかを考えているという。



2017年3月にオープンした「さんさん商店街」は、南三陸町志津川地区復興のランドデザインを担う建築家隈研吾氏が設計、デザインを手がけた。地元産の南三陸杉を使った6棟の建物に約30店舗が軒を連ね、週末には多くの人でにぎわう。左上／南三陸町内の飲食店のなかで、人気の的は、地元の旬な海の幸をふんだんに使った、見た目と味で二度楽しめる「南三陸キラキラ丼」。(写真提供：南三陸町) 左下／町内に複数見られるモアイ像は、1960年のチリ地震津波の被害を経て友好関係を築いてきたチリから復興のシンボルとして贈られた。



人口約二万七六〇〇人のうち、死者六二〇人、行方不明者二一一人。町全体の六割にあたる三三二一戸が全半壊する甚大な被害を前に佐藤氏が掲げたのは、二度と津波で命を失わない町、そして

持続可能なまちづくりという二つの大きな柱だった。

「毎日遺体安置所で手を合わせながら、二度とこの地獄を将来世代に味わわせてはならないと思い、震災直後の四月には職住分離を決断。七月に副町長と手分けしての説明会を、一週間で二三回行い、住民の皆さんの理解を得て、住居を高台に、商店街や工場は中心地に、という復興計画を策定しました」

高台への住居移転計画は二〇一七年に完了し、仮設住宅も二〇一九年には解消された。「さらには未来を見据え、持続可能なまちづくりを標ぼうしてきました。南三陸町は分水嶺に囲まれていて、町に降った雨は全て町に流れ、志津川湾へと注がれます。まさしく山と川と里と海が一体になっている町です。この恵まれた自然とどう共生していくかということも、震災を経て一層真剣に考えました」

現在、建築家隈研吾氏のランドデザインにより、町の中心部は

南三陸町震災復興祈念公園と南三陸さんさん商店街をつなぐ中橋も、商店街同様に隈氏がデザインし、2020年10月に開通。南三陸杉を使い、やわらかに景色に溶け込んでいる。



二〇二〇年十月完成の南三陸町震災復興祈念公園を要に整備が進み、あたらしい商店街が家族連れでにぎわう穏やかな日常が戻りつつある。南三陸町防災庁舎ほか九件の建物が災害遺構として残された。その町を囲むように海と山がある風景には、一〇年前の面影はほとんどない。

まちの景色が変わるなか 震災の記憶を 人々に伝えていく

そんな状況でも、大震災の記憶を受け継いでいく地道な努力が重ねられていく。そのひとつが、南三陸ホテル観洋の震災を風化さ

せないための「語り部バス」だ。二〇二二年二月一日にスタートして以来、コロナ禍の影響があった一時期を除き、毎日催行。「のべ四〇万人以上にご利用いただきました」と話すのは、同ホテル第一営業次長兼企画課長で、自らも被災者で語り部として震災を語り続ける伊藤俊氏だ。

語り部バスの所要時間は六〇分。バスでまわる場所は大きな被害があった所だが、工事中や更地がほとんどで、過去の状況を知らなければ、そのまま通り過ぎてしまいかねない。語られて初めて、当時の様子がまざまざとよみがえってくる。宿泊客の避難に専念した震災発生時や被災した自宅の

南三陸ホテル観洋の「語り部バス」で語り部を務める、第一営業次長兼企画課長伊藤俊氏。自社所有の大型バスで被災場所を案内する。その活動は他地域との連携を生み、「東北被災地語り部フォーラム」やシンポジウムなども開催されるように。



その縁を契機とした講演先で、関係者から言われたことが、伊藤氏の心境を大きく変えたそうだ。

「まず生き残ること、生き残ったら生き延びること、生き延びたらそれを次に生かすこと。そう聞いて以来、経験談だけではなく、それを次に生かすために、何をどう伝えるべきなのかを考えるようになりました。日々町の風景は変わり、実感をもつてあの時を振り返っていたのは容易ではありませんが、また来ますと言われると、その方に何かを刻むことができたかなと思いますね」

修学旅行生の参加も多い語り部バスのなかで伊藤氏は最後に必ず、手を合わせてその温もりについて語る。

「あの時何度も安置所へ行った私たちは、冷たい手を知っています。手をつなげば、本当は温かいはずなのに。人間関係が次第に希薄になっていく時代だからこそ、とりわけ子どもたちには手のぬくもりを知ってほしいし、命の大切さと向き合ってほしいと思っています」

様子など、自身の経験も交えながら、何が起こり、その時どう思っていたのかを丁寧に説明する伊藤氏の言葉のひとつひとつが胸に深くしみた。

この語り部バスが生まれた発端は、電気や水道が復旧し始めた二〇一一年の夏からボランティアや視察の宿泊客が増え始め、その方々をホテルスタッフが案内したことだった。

「この町で何が起こったのか知りたいというお客様が少なからず

おられました。ただ、道も変わり、標識もないなか、そうした方々がどこに行つていいか分からない様子でした。ホテルのスタッフがその案内役を申し出たのが、語り部バスのきっかけです。かつての町の姿を、地元にいる自分たちが情報発信すべきだと頭では分かっていたのですが、最初のうちは涙がこみあげて話せなくなることもしばしばでした」

語り部バスの活動はやがて、全国の被災地との連携につながる。

漁師の生き方が変わった 持続可能な 養殖の取り組み

津波が変えたのは、陸の景色だけではなく。町の南、カキを主軸とする養殖が行われていた戸倉地区でも、養殖道具の全てが流された。しかし現在、カキの一経営体当たりの売上金額に関しては震災前より約七〇%増えていると話すのは、宮城県漁業協同組合志津川



右／南三陸町旧防災対策庁舎。震災の記憶を未来に継いでいる。左／南三陸町震災復興祈念公園内の「名簿安置の碑」には、東日本大震災の犠牲者・行方不明者の名簿が保管されている。



地元で長年親しまれてきた「サンオーレそではま海水浴場」は東日本大震災により大きな被害を受け閉鎖されていたが、2017年夏に復活。海水浴場から歩いて渡ることのできる荒島には、漁業関係者の信仰を集める「荒島神社」が立つ。

その昔、人々の争いに怒る神が割ったという伝説が残る「^{かみわりさき}神割崎」は、2月中旬と10月下旬頃、岩の間から日が昇る絶景が見られる。



支所戸倉出張所カキ部会長の後藤清広氏だ。
「震災前は、いわゆる過密養殖でした。量をかせごうとカキの養殖^{いかだ}をどんどん増やした結果、カ

キの成長は遅くなり、品質も落ちていったんです。問題意識は持っていました。漁師が所有する筏の規模がそれぞれに違う中で次の一歩が踏み出せない。それどころか、筏の数が増え、さらにカキの育ちが悪くなる悪循環に陥っていました」
津波で筏が失われた後、後藤氏が目指したのは、自然と共生する持続可能な養殖だ。筏の既得権を白紙に戻すことから議論すべく、部会では何度となく話し合いが重ねられたという。

「将来のためには持続可能な漁業に転換する必要があると強く思っていました。しかし、筏の数を減らすことは収穫量に響きま

すから、誰も怖い。とはいえ、小さな町で生活圏は皆一緒ですから、本音でぶつかって腹を割って話せる土壌があります。議論で険悪になったとしても、海の上では何かあったときに助け合わないといけない仲ですから。最終的には、全員の理解が得られました」
二〇一二年に立ち上がった、三年間限定の国の「がんばる養殖復興支援事業」が背中を押し、二〇〇人を超える漁師が挑んだあらたな取り組みの礎になったのは、海の区画を整理した設計図。曖昧だった筏の配置を、細かく図面に表したという。

「震災前は五〜一五メートル置きだった筏間の距離を四〇メートルまで広げました。その結果、これまでよりも大粒のカキが、従来より二年近くも早く、一年足らずで育つようになりました。筏の数は減りましたが、生産量は二倍、品質の向上により売り上げもアップ。加えて、四割のコスト削減、労働時間の大幅短縮を実現しました」
他に例のない改革は外部からも評価され、二〇一六年には「責任ある養殖により生産された水産物」であることを示す養殖の国際エコラベル、ASC認証を取得。

左／常識を覆す挑戦が美味なカキを生んだ。澄んだ甘みの味わいが人々を魅了する。下ノラムサール条約湿地に登録された志津川湾。絶滅危惧種で国の天然記念物指定の渡り鳥コクガンが豊富な海藻類を求めて同湾に飛来する。
(写真提供：南三陸町)



宮城県漁業協同組合志津川支所戸倉出張所カキ部会長の後藤清広氏。





左／青森県八戸市から福島県相馬市まで、太平洋に面した4県をまたがる全長約700キロメートルの「みちのく潮風トレイル」は復興プロジェクトのひとつ。南三陸町では約38キロメートルにわたり、自然のなかを行くトレイルが楽しめる。（写真提供：南三陸町）
下／仙台藩養蚕発祥の地として栄えた歴史の展示施設などがある入谷地区の「ひころの里」。



それによりこれまで縁のなかった先との取引が生まれ、安定した収入も得られるようになった。

さらにはU・イターンや新規就業者も増え、高齢者がほとんどを占めていた部会の平均年齢が、それまでの六〇代から四〇代になったと後藤氏は顔を綻ばせる。

「全国的に一次産業では後継者問題を抱えています。いいものをつくる環境があり、それが客観的に評価され、収入があれば、漁業をやりたいと思う若者は多い。カキ同様、人にとっても環境が大事故だと教えられました。大震災は苦難の連続でしたが、これまでできなかった養殖方法の転換に踏み出すきっかけになりました」

二〇一八年には、絶滅危惧種を含む貴重な藻場として、養殖場で

ある志津川湾がラムサール条約湿地に登録された。

「かつては生産本位で自然に負荷をかけていましたが、まわりに配慮しながら皆で豊かになろうという意識改革が着実に進んでいます。たとえまた津波がきても、設計図がありますから、われわれは今なら数カ月で養殖場を復活できるんです」

あらたな ビジネスが生まれた山と 杉のブランド化

持続可能な取り組み。それは海だけではなく、南三陸町の約八割を占める山でも始まっている。江戸時代から林業を営んできた株式会社佐久の専務取締役で南三陸森林管理協議会に所属する佐藤太一氏は、その背景を語る。

「分水嶺に囲まれた南三陸町は、山を起点に川、里、海が全部つながっています。だからこそ、水質や土砂災害などに影響する山の状態はとても重要なんです。過去の大地震や大津波でも、山だけはほぼ無傷でした。この揺るぎない財



産を生かすことが、この町の持続可能性に必ず寄与する。震災後、林業関係者のなかで環境と将来をあらためて考えようという思いが強くなりました」

南三陸町の山を覆うのは、材質の強度と淡いピンク色の美しさが特徴の「南三陸杉」。江戸時代に伊達政宗がこの杉を求めたという逸話が残るほど昔から良質な木材として知られ、震災前からブランド化が進められていた。その山と杉の評価を高めるために二〇一五年に取得したのが、南三陸町と佐久を含む民間団体四社が管理する森林加工流通過程を対象にした、FSC®認証。森林資源の持続可能な

林業と不動産業を営む株式会社佐久の専務取締役で、南三陸森林管理協議会のメンバーでもある佐藤太一氏（上）。山主、森林管理業、素材生産業、丸太の切り出し業など、分業が当たり前だった林業を見直し、写真の商品をはじめデザイン、製造の内製化を進めている。



（写真提供：南三陸町観光協会）

供給、環境への配慮、地域への貢献などがきちんと行われていることが認められての結果だ。

「以前から国際認証の取得に向けた機運はあったものの、盛り上げがれずにいました。震災を機に、皆が抱いていた危機感と、行政が掲げる持続可能なまちづくりの構想が、実際の国際認証の取得につながりました」

FSC®認証の取得により、コーヒーチェーン、天然志向の入浴用品メーカー、アウトドアブランドといった環境問題への意識の高い

2011年4月の第1回より毎月行われている「復興市」後の参加者の集合写真。2020年4月以降は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、実施の有無をその都度検討している。(写真提供：南三陸町)



グローバル企業が南三陸杉に注目し、あらたなビジネスが生まれているそうだ。

「南三陸杉の質の高さだけではなく、正しい林業を行っているわれわれの活動の価値を評価してもらう形が生まれています。都市圏の大企業と田舎の山が、持ちつ持たれつの関係であるこの流れをより進めていきたいですね」

佐藤氏がさらに願うのは、幼い頃に昔話として聞いた森のイヌワシが、南三陸の森にふたたび戻っ

てくること。正しい林業、人にも動植物にもやさしい健やかな森づくりが、未来に向けて続けられている。

海の幸、山の幸 とともに歩む南三陸町 だからこそそのワイン

南三陸町では、あらたな産業も生まれている。そのひとつが、二〇一七年からスタートした「南三陸ワインプロジェクト」。二〇一九年に南三陸町の地域おこし協力隊として推進メンバーに着任してワイン造りに励むのは、南三陸ワインナリー株式会社代表取締役の佐々木道彦氏だ。



赤、白、ロゼのワインは現在、地元産を含む東北地方産のブドウを使って醸造。写真は海中熟成を経て、フジツボが貼り付いたボトル。

もともと静岡の大手楽器メーカー

カーで商品企画や新規事業開拓を担っていた佐々木氏だったが、復興支援で東北地方に通ううちにものづくりの経験をなんらかの形で生かしたいとの思いが募り、二〇一四年に仙台市に移住。その後、縁あってワインと関わるようになるなか、南三陸町とそのワインプロジェクトに興味をひかれていっ

たそうだ。

「南三陸町は、海も山も食材が豊富にあるのが印象的でした。この恵まれた食材にワインを組み合わせることで、地域のあたらしい

食産業がつけられるのではないかと、という可能性を感じました」

とはいえ、ワインという、この土地になじみのない産業を一から立ち上げることに、当初不安視する声は少なからずあったそう。そのため佐々木氏は、カキやホタテ、銀鮭など、旬の食材が味わえる地元の復興イベントに参加し、そうした食材と併せてワイン



醸造所(上)、ワインなどの購入ができるショップに加え、飲食スペース(左)も設けられた海の見えるワイナリー。



南三陸ワイナリー株式会社代表取締役の佐々木道彦氏。海辺に立つワイナリーは将来的に、地元の人と旅行者とのコミュニケーションの場になれば、と話す。



上／町のあちこちで今も復興に向けた工事が行われ、景色は日々、変化。下／伝統的な紙細工をモチーフに、南三陸町の景色やメッセージが描かれた「きりこボード」は、町内の複数箇所に展示されている。

を実際に味わってもらうことに努めたという。

「年配者のなかにはワインを飲んだことがない方も多く、私たちが造るワインのすっきりとした味わいはもちろん、地元の魚介類との相性の良さを楽しんでもらううち、町の方の意識も不安から期待に変わっていききました」

二〇一九年には、同プロジェクトの初めての商品「DELAWARE 2018」が「日本ワインコンクール2019」で奨励賞を受賞。公に実力が評価され、地元でのぶどうの栽培が拡張されるなか、二〇二〇年十月には醸造所に併設した飲食スペースのあるシヨップをオープン。ワインと食のイベントも積極的に行っていききたいと語る



佐々木氏が大切にしているのは、ワイナリーのコンセプトでもある「南三陸のみんなとおいしくなりたい」という思いだ。

「地元の食材とのマッチングをイメージしてワインをつくっており、ワイン会ではお世話になってる漁師さんや農家さんが一緒に参加されることもあります。ワインと食が人と人、人と地域をつなぐ結節点となって、南三陸町から人の輪が広がっていけばうれしいですね」

南三陸町戸倉地区のカキ漁師と連携し、養殖筏を活用したワインの海中熟成も始めた。地上と比べ、熟成度合いが深まるというのが興味深い。ワインのおいしさとさまざまな取り組みに関心が集まれば、南三陸ワイナリーは将来的に、旅人と地元をつなげる場にもなることだろう。

未来の若い世代に託される あらたな取り組みと震災の記憶と

町長の佐藤仁氏は、町の現状をあらためてこう語る。



「海の国際認証（ASC認証）と森の国際認証（FSC認証）を併せ持っているのは、世界で南三陸町だけ。山、海の取り組み、そして新規産業。持続可能な町になるために、それぞれの分野で果敢にアクションを起こしているのが、今の南三陸町の姿だと思えます。自然環境と共生する町として種をまいてきたわれわれの後、次の世代がどう花を咲かせてくれるか。これからの南三陸町が楽しみです」

二〇二二年には、東日本大震災の伝承館として「南三陸311メモリアル」の開館を予定するなど、人々の記憶を受け継ぐ努力も重ね

震災後、ボランティアが中心となり雑木林を開拓して生まれた「海の見える命の森」。その頂には、二〇一九年にミャンマーの有志から贈られた「南三陸大仏」が立ち、志津川湾を見つめる（上）。また大仏のそばには、「伝えよ千年万津波でんでんこ」（津波でんでんことは、「津波が来たら高台に逃げる」の意）と書かれた小さな石碑も立っており、東日本大震災の教訓を静かに伝えている（左）。



「南三陸町には豊かな自然があります。津波の被害にはあいました。豊饒の海は残りました。私たちはこの海、そして山とともに生きていきます」

佐藤氏に話を伺った翌朝、志津川湾の向こうから顔を出した朝日とその景色のあまりの美しさに見入り、胸に熱いものがこみあげた。何が起ころうとも昇る太陽のように、持続可能な未来を実現すべく、南三陸町はこれからも力強く歩み続ける。

※本取材は昨年十二月二日（水）、三日（木）に行われたものです。